

「築土構木」に寄せて

小林 潔司

「土木」という用語は、誰がどういう意図で生み出したのかいまひとつよくわからない。さまざまな説がある。淮南子の「築土構木」という言葉から生まれたという説明もその1つである。

その部分を紹介しよう。「昔、民は湿地に住み、穴ぐらに暮らしていたから、冬は霜雪、雨露に耐えられず、夏は暑さや蚊・アブに耐えられなかった。そこで、聖人が出て、民のために土を盛り材木を組んで室屋を作り、棟木を高くし軒を低くして雨風をしのぎ、寒暑を避け得た。かくして人びとは安心して暮らせるようになった」。

多くの土木技術者が引用する件ではあるが、中国の古典から引用したということで満足して、そこから議論が先に進まない。その説明がいまひとつピンとこないのである。もちろん、このような社会事業の重要性は論を待たないが、堯、舜による治水事業と比較すれば明らかに土木の主流ではない。また、なぜ諸子百家の中で主流でない淮南子に着目するのか、という疑問もある。

金谷治「淮南子の思想」を読んでみた。労作である。淮南子が生まれた背景に半分近くを割いている。大筋を掻い摘んでまとめれば以下のようなになる。

「紀元前122年、漢の武帝の元狩元年に淮南王に任ぜられていた劉安が謀反の罪に刺されて自害する。淮南は淮河の南方面の土地、現在は安徽省の北部。淮南王劉安は当代きっての文芸主義者で、王のもとに多くの学士や食客が集まり、淮南は華やかな文化に彩られた。劉安が悲劇を迎え、淮南文化は途絶え『淮南子』だけが残される。それは当代における雑家の知恵の集大成である。その一方で、『淮南子』には楚の風土にもとづく価値観と道家の思想に基づいた編集感覚が満ちている。」

話は、淮南子が編集された時代から、さらに数百年さかのぼる。中華文明は周の社会・制度・文化を基軸とし華夷秩序が保たれた。周の基軸モデルから見れば、楚の社会文化は単なる辺境でしかない。しかし、春秋時代、南方の楚が力をつけてくる。楚の地に土地伝来の伝承に基づき、いつしか「楚辞」が生まれる。楚辞はそれ以前の古代中国にはまったく見られなかった新しい文芸である。

戦国時代、楚はついに戦国七国のうちの大国、秦と斉と並ぶに至る。しかし、蘇秦や張儀による合従連衡策により、秦の勢力が突出し楚は傾国の危殆に直面する。この時、屈原

が登場する。屈原は、孤立無援となった楚が存続するには六国が同盟して秦に当たるよりほかはないと懐王に提言するが受容されない。側近たちの讒言により放流。屈原は公憤に震え、義憤に怒り、洞庭湖のほとりの汨羅の淵に身を投げる。屈原が祖国を思い、万感無念の裡に綴ったのが楚辞文芸の傑作「離騷」である。

楚は滅亡し、始皇帝による中国統一が実現。その秦もわずか十数年で滅び、時代は漢の世となる。漢の高祖劉邦は天下統一の 3 年後、韓王信の反乱を破っての帰途、趙の国に立ち寄った。趙王は粗暴な皇帝に礼を尽くし、夜な夜な美女をあてがった。その一人が身ごもった。そこで生まれた嬰兒が劉長である。しかし、劉長の母は漢室に疎まれ自害する。残された劉長は高祖の皇后、呂后に育てられる。やがて高祖はこの少年を淮南の地に送り厲王とした。

高祖が亡くなり、次の恵帝、その次の文帝になったとき、厲王劉長は 20 歳の若者になっていた。青年はひそかに袖にしよばせた鉄槌をもって、母を自殺に追いやった辟陽侯審食其を打ち殺す。しかし、兄の文帝はこれを許した。劉長は淮南に戻ると漢の法律を無視し、そればかりか漢室への謀反を企てた。陰謀はすぐに露見した。文帝は弟を死刑とするのは忍びなく四川の奥地に流したが、矜持の高い厲王は餓死を選ぶ。

厲王には 3 人の遺児がいたが、長男の劉安が淮南王を継承する。劉安は、父と異なり書を好み、琴絃を愛し、学士を敬愛し、淮南の地に生まれた伝承文化に関心を持った。文帝が死に景帝が立ち、次の武帝が 18 歳で即位したとき、劉安は 40 歳になっていた。あるとき、武帝は淮南王に屈原の難解きわまりない長編詩『離騷』を解説せよと命じた。

なぜ武帝は、辺境の淮南王に楚辞の伝承の意味を紐解くことを命じたのか。楚には国家祭祀を司る莫敖という重要官職があり、屈原の一族である屈氏がその職掌を担っていた。楚辞とは、莫敖が操っていた言霊技能の発露であり、淮南王とその膝下は、この技能を継承した。淮南王は離騷解説のために賓客学士食客を集めた。それと同時に彼らの知力と風情を大いに好み、古今における楚辞の知を集大成する試みをはじめた。かくして淮南子の編纂が始まる。しかし、歯車が狂い始める。二人の王子の確執が深刻化し、食客八公の一人が淮南を去り淮南の政治の乱れを吹聴する。淮南は中原による管理下に置かれ、淮南王は謀反を決断する。計画は露呈し劉安は自殺する。

淮南の国は没収されたが、淮南王が命じた淮南子はその後も門下により執筆や編集が進む。淮南子には老荘思想や楚辞が淮南王の生きざまそのままに脈動する。劉安が壮年に向かうとき、武帝は華夷秩序の強化に驀進しはじめる。武帝にとって、淮南は辺境国のひとつにすぎない。武帝は、中華大陸のさまざまな地域を、ことごとく略奪しようと考えた。

それゆえ西域、匈や朝鮮半島、淮南からも統治のエンジンを収集しようとした。淮南王に離騷の解読を求めたのはそのためである。しかし、漢帝国の形が概成したとき、辺境各地の特異なエンジンを収集する必要がなくなった。また、辺境の人材をそのまま中央政府に取り込めば、それぞれの地域の由緒などはどうでもいい。儒教が普及すれば老荘思想を抑圧することができる。

武帝の帝国主義政策により、中央と辺境ははっきり切断され、辺境の社会文化は見捨てられた。淮南王は武帝の帝国主義に抵抗するため、老荘思想を基軸に辺境の思想を集大成しようとした。これが淮南子である。淮南王は、遠い時代の楚の文化的遺産をたどり、淮南の地の来し方行く末のための歴史文化と知恵の再編集を試みたのである。淮南王は謀反の罪に問われ、志し半ばで悲劇の王になった。けれどもその意図の大半は、いまなお淮南子そのものによって語り継がれることとなる。貧しい辺境淮南の地において、そこに息づく人たちのための社会的事業の重要性を解く。それが築土構木の思想ではないかと思う。

淮南子が編集されたその当時の文脈をたどれば、築土構木という言葉から2つの思想を読み解くことができる。ひとつは、中央と周辺という区分である。この区分を用いれば、築土構木は明らかに周辺からの発想である。中央を支配する側、周辺を支配される側という言葉に置き換えれば、築土構木は支配される側の立場に立つ思想である。しかし、土木事業であれ社会事業であれ、事業を実施するためには専門的な知識が必要であり、事業のための財源が必要となる。それは上からの事業にならざるを得ないが、事業は地域の人々の「思い」や「気概」を尊重し、それを出発点とすることを意味する。

いま1つは、築土構木の思想が生まれた淮南は、多くの災害に見舞われた地であることに起因する。住民の生活は困窮を極めた。その中に聖人が現れ社会事業の必要性を説く。土木工学は、災害に対する防災・減災事業の発展に貢献してきた。しかし、築土構木の思想に立ち帰れば、これまでの土木工学の研究・教育において、大きく欠けている部分があると思わざるを得ない。それは被災者に寄り添うという視点である。grief care、悲しみにどう立ち向かっていけばいいのか。そのうえで、災害にどう立ち向かっていけばいいのかを考えることが必要である。その思想が築土構木である。

土木という言葉が、どの程度淮南子の思想を踏まえて誕生したのかどうかは知る由もない。しかし、土木工学が人間のための総合工学として成熟するためには、築土構木という言葉をはぐくんだ淮南子の思想の現代的意味を考えることが重要であると思う。